

安全と安心を守るAI(人工知能)の進化が著しい。

今や「アンチ監視社会」を叫ぶ声は、「パブリックセーフティ」という大義にかき消されている。社会にちりばめられた多様なハードウェアから収集したビッグデータが高速解析され、まるで海外ドラマのようなAIによる犯罪予測と対処が可能になった。

中国の犯罪者追跡システム「天網」や、米国メンフィスの犯罪抑止プログラム「ブルクラッシュ」は、すでに多くの効果を実証済みで、日本においてもシステム構築に動き出している。

AIは画像認識や行動検知、生体認証だけでなく、行動予測と解析により、不審者や不審物の検知、追跡を担う。働きのAIは、街中の防犯カメラや通行人の位置情報、SNSの書き込みにまで目を光らせ、耳を研ぎ澄ます。

いわば「天の目」「天の耳」を駆使して、24時間学習に余念がない。

デカの勘より「天の頭脳」というわけだが、足りない器官が一つある。匂いを追跡する「鼻」だ。嗅覚だけはAIをもつてしてもフォローできない。

つまり、人間の代わりはできても、犬の代わりはできないわけだ。

いま、数は少ないが、国際空港を中心に多くの警備犬(探知犬)が活躍している。成田では、かわいいビーグルが検疫探知犬として、伝染病や病害虫を水際で防いでいる。海外では、象牙や紙幣、麻薬など多様

パブリックセーフティ —AIと警備犬—

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

な犯罪の匂いを追跡する警備犬が沢山活躍しており、思わぬ所で鼻を利かせている。

中でも、よく知られているのが爆発物探知犬だが、日本では警察に若干の配備があるものの、まだまだ数が少なく、民間警備会社では皆無だ。

歌手のアリアナ・グランデのロンドンライブで爆弾テロが起きた後、訪日ライブにおいても爆弾探知が要請され、結果、警察が対応することになった。

今後、東京2020にむけて警察だけでなく、民間においても積極的な警備犬の導入が期待されている。AIでは捕捉できない「犯罪の匂い」をハントできるのは、犬だけだ。人間には知恵はあるが、経験による先入観が多くの想定外を作り出してしまふ。学習と本能で働くAIと犬は、先入観を排除してコツコツと為すべきことを繰り返し、決して勘には頼らないのだ。

幼児の行方不明事件では、警察を差し置いて、ボランティアおじさんの鼻(勘)が大活躍した。そもそも、夜間に熱感知ドローンを飛ばし、3頭ほどの警備犬が入っていたら、そんな失態を演じることはなかっただろう。

先入観は、分析を濁らす。

想定外を作り出す「人間のこころのスキ」と言ってもいい。

パブリックセーフティ「公共の安全」には、決してスキがあつてはならない。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価700円
Amazonにて販売中